



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二十二号〜

清明 せいめい

四月五日

一色能の楠

「能にあっても能にあらざ」といわれる翁舞。おきなまい伊勢市一色町いっしきちやうに伝わる「一色の翁舞」は、毎年一色神社の例祭日に奉納されています。今年は、能楽保存会が結成されて五十周年の節目でした。

三月十一日午前十時半、一色神社前の広場で翁舞が始まりました。国選択無形民俗文化財に指定された「一色の翁舞」は代々地元在住の大夫たぢゆうが心身を清め、天下泰平と五穀豊穰を祈って舞います。この日は麗らかに晴れた春の一日となり、楠の大木が茂る下で舞う姿は、まるで楠の精霊が舞い降りたようでした。じつは長年保存会に尽力した吉川貞夫会長は例祭の一週間ほど前に亡くなり、この日は代役の方が急遽舞ったとのこと。すでに印刷されたパンフレットには吉川会長の名が刻まれていました。この日の晴天は吉川会長の想いを映すようでした。

神社の大楠は、樹高十メートル、幹回り八メートルあまり。説明版によれば、江戸時代末に一度、火事によって焼失したが、その後、何本かの新芽が出て、焼失した古木を取り囲んで成育し、まるで一株のような形で今に至るとあります。根元をみると大きな空洞があり、そこに途中で朽ちた古木が見えます。説明版通りなら約百五十年で楠は大きく育つたこととなります。

一年中、緑の葉をつける常緑の楠ですが、春には古い葉を落とし、すぐに新葉が出ます。そのためいつも緑の葉をつけているように見えるのです。

四百五十年の伝統を誇る一色能。その年月は、この楠のように常に新しい若葉が育ち、脈々と技を伝えてきたものだったのでしよう。春四月、楠の枝先にはすでに赤褐色の新葉が混じっていました。楠若葉の美しい時期を迎えます。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ 五十鈴川桜まつり

新緑の朝熊山を背景に、対岸の桜を眺めながら、お花見料理で華やかに、夜桜のライトアップでしっとりとお花見していただきます。

五十鈴川の桜と一緒に、うらかな春のひとつときをお過ごし下さい。

と き／3月31日(土)～(桜の見頃の時期に合わせて) 10:00～
ところ／五十鈴川河川敷周辺

● 花見屋台

田楽や団子などの屋台が並びます。赤毛せんの敷かれた縁台に腰をおろし、のんびりとお過ごし下さい。

● 夜桜のライトアップ

日没より、五十鈴川新橋周辺の夜桜をライトアップします。風のない日は、五十鈴川の水面に映る美しい桜もお楽しみください。

と き／満開の頃 19:00～21:00

※雨天時は中止させていただく場合もあります。予めお問い合わせの上、お越しください。

● 春の特別奉納芸能

古より伝えられた音・舞に常に新しい風を吹き込み続けている、『日本芸能 花咲音』による演奏です。

と き／4月7日(土) 19:00～ 4月8日(日) 14:00～

ところ／五十鈴川河川敷特設舞台

観覧料／無料

出演／花咲音(加藤木朗、内藤哲郎、阿部一成)

五十鈴塾

○ 伊勢の玄関口・桑名について

桑名といえば、時雨蛤や焼きハマグリが思い浮かびますが、桑名の魅力はそれだけにとどまりません。木曾、揖斐、長良の三川が流れこみ、河川海上交通の要衝として重要な位置をしめた桑名は、中世には米・材木の一代集積地として「十楽の津」といわれるほど繁栄した港でした。

江戸時代は東海道唯一の海路として名高い「七里の渡」の一方の玄関口として、東国からの伊勢参りの人々でにぎわいました。

その「七里の渡」からは桑名城を望むことができます。東海道の要衝である桑名には徳川氏の重鎮・本多忠勝が十萬石の大名として入り、近世の城下町として「慶長の町割り」と言われる都市整備を行います。本多氏は忠勝の孫・忠刻の代に姫路に移りますが、忠刻の正室が徳川家康の孫・千姫であったことから、わずかですが千姫も桑名で過ごしています。その後、いくつかの藩主変遷を経て、幕末時の藩主松平定敬は戊辰戦争の際に旧幕府側に付き、激動の時代に直面していくこととなります。また妖刀伝説で知られる「村正」は桑名で作刀されていました。知れば知るほど興味が湧く桑名についてお話いただけます。

と き／4月11日(水) 13:30～15:00

講師／杉本 竜(桑名市博物館館長)

参加費／一般1,400円 会員900円

集合／五十鈴塾右王舎

※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

はないかだ
花筏

川面に舞い降りた桜が、岸辺に着かず離れず、筏のように浮かび、流れにまかせて漂い続ける。古人がその景色に見惚れ、詠んだ言葉が花筏。粒餡を求肥で包み、その上に桜の姿をとどめて、花のなごりに心を残す思いをこめました。

じんぐう
神宮つつじ

かの西行が、神路山の岩根に見たという、つつじ。今年も神宮の一面で、そのつつじが花を咲かせます。木々の緑と、赤いつつじが見せる鮮やかな色彩の対照を、きんとんで表現しました。

こちよう まい
胡蝶の舞

神宮では神恩への感謝とともに、民福を祈念するため、毎年四月、春の神楽祭が行われます。神苑に朱塗りの舞台をしつらえ、古式ゆかしく演じられる『胡蝶の舞』。その装束の美しさを、白餡と羊羹を使い、お菓子のかたちで写し取りました。